

『生命の光』誌第9号より

## 革袋の涙・生命の光

――詩篇第56篇――

1949年7月1日

小池辰雄

【註】 【解説】 （参考）「藤井武選集」より

## 【詩篇56】（私訳）

楽長により、「遠くして無音なる鳩」の調べにて。ダビデのものしたる  
秘詩。ペリシテ人がガテにて彼を捕えしときに。

1 神よ、憐み給え。人われに息巻きかかり、

戦人終日我れを虐ぐ。

2 われを覗う者終日我に息巻きかかる、

げにや驕りて我に戦を挑む者多し。

3 我れおそるる日には、我れ誠に汝に依頼む！

4 神に在りて我れ聖言を讃えまつらん、

神に在りて我れ依頼みたり、我は怖れじ、

肉なるもの我に何をなし得んや。

5 終日彼らはわが言をなじり、

彼らの思念はすべて我に逆らいて禍す。

6 彼らは群をなしてひそみ、わが足跡をつけ、

かくしてわが魂を覗う。

7 彼らを解き放ちて不義に至らしめ、

憤りをもて諸々の民を倒し給え、神よ！

8 汝は誠にわが流浪を数えたまえり。

わが涙を汝の革袋に受け入れ給え。

汝の書に……あるに非ずや！

9 わが呼び求むる日にはわが諸々の敵退かん。

神我れを護り給うこと、此ことを我を知る。

10 神に在りて我れ聖言を讃えまつらん。

ヤーウエーに在りて我れ聖言を讃えまつらん。

11 我れ神に依頼みたり。我は怖れじ。



人我れに何をなし得んや。

12 神よ、汝の誓はわが上にあり、

我れ感謝の献物を汝に捧げん。

13 げに汝はわが魂を死より救い、

わが脚を躓きより助けいだし給えるに非ずや。

14 神のみ前に、生命の光のうちを歩まんためにこそ。

# 【註】

「楽長により」… 詞書にこの語あるもの合計55の詩篇。歴代志略上15・21の「拍子をとれり」はこの「楽長」という語と同語の動詞。「楽長」は即ちレビ人の歌班を指揮した者（歴代志略上25・1〜8）である。

「遠くして無音なる鳩」… グンケルは「遠くの樹の鳩」（？）と訓もうとし、シュミットは「遠くのテレビントの樹の鳩」とよもうとする。ケーニヒは正文通りによみ、その意味は、「異郷で郷愁のため沈黙考している魂」であるとなす。ケーニヒのとり方が真相に近いであろう。この内面的な詩にふさわしいメロディーなのであろう。

「秘詩」… 大体こんな意味にとつて可いと思う（「旧約知識」誌第10号、拙稿「詩篇第16」参照）。「ダビデのものしたる」は、学者間に問題になっている言であるが、ここでは、この詩を古いものと見て「ダビデの作」の意にむしとりたい。少なくともこの詩の原形をダビデに帰したい。

「ペリシテ人がガテにて彼を捕えしときに」は、サムエル前書第21章よりも第27章の場合を想像すべきであらう。第8節の「汝は誠にわが流浪を数えたまえり」によれば、既に転々流浪漂泊の跡を想うべきであるから。

1節 「戦人（ローヘム）… 同節の「人（エノーシュ）」と同じくこの場合は「敵」を意味する集合名詞。詩篇35・1参照。但し、「戦をいとなみて」というように動詞的によむことも出来る。

3節 「我れおそるる日には」は、第4節、第11節に「我は怖れじ」とあるから正文の誤と見なして、これを訓み変えようとする学者にグンケル、シュミットなどの有力者がある。即ち「我が叫ぶ日に汝我を助け給え」とよむ。併し内外の敵に狙われている者が怖れなきわけはなく、「我れ誠に」と言いて第一人称を特に強めてこの句を継いで告白しているところに、「怖れ」に対する「信頼」が、この「怖れ」を克服する消息と見るべきであると思う。かくて4、11節の「信頼」に在って「怖れなき」意味が却て本当の力を得て来る。表現の上に矛盾が出てくるところに却て人間の心境の真相を察知すべきである。なお、この節の頭に「至高者よ」を入れる説もある。というのは前節の「驕りて」を説の句分からこの節の頭に入れて、その意味を全く別な「至高者」と解する（ブリッグス）。或いは可能であらう



が用例の上で稍無理と思われる。

4節 「肉なるもの」… 原語「バーサール」。第1節の「人（エノーシュ）」と共に「死すべき者はかなき者」を意味する。「霊なるもの」「ルーアハ」に対する語。その中間の「心魂あるもの」が「ネフェエシュ」である。これら語について考察することは他の場合に譲る。

8節 「流浪」は「不定不安の生活」、「惨憺たる生活」（キッテル）という一般的な意味からある限定を加えた訳である。ダビデの生涯を背景に考えれば「流浪」でよいわけであるが。併しこれを更に別な語に訓み変えて「わが眠られぬ夜な夜なを」（グンケル、シュミット）とする説もある。「数える」という語によく合うわけである。併し転々処を変え居を移すこと幾度かを知らぬ流浪りゅううざんの生活は作者が誰であろうとも、この詩の内容からむしろ自然に想像され得るところである。

「汝の書」ふみに……あるに非ずや！」は、その外面的流浪の生活と内面的悲嘆の心境とのすべてが、人には如何に知られず、無視されて居ようとも、神の書にしろされてあるのではないか、という作者の切々たる哀願と確心の交錯した気持であろう。それらのすべては既にしるされてあり、且つ将来も記されるという過去と未来を含んだ現実感を見るべきである。それ故、訳としては「……」を以て余韻よゐんをもたせたわけである。

12節 「汝の誓」… 「汝に誓いたる誓」の意に解せられている。有力なる数種の註解がすべてそう解している。汝に誓った誓が自由の果たすべき義務として「わが上にあり」という意。併し詩61・6には「わが誓」という端的な表現があるので、この「汝の誓」の「汝」を主語的にとつて、4、10両節で「讃えまつる」といつている。「聖言」「ダーバール」がこの「汝の誓」であつて、「怖れ」と「躓つまずき」と「死」から救い給う神の「救い」がこの「誓」の内容であると思われる。大学者を数名も向こうに廻したこの反対説は無謀笑止の沙汰かも知れないが、私の誤りが自覚される日には訂正するとして、今はこの大胆な解釈を呈しておくより仕方がない。

14節 「生命の光」… 神は「生命」であり、「光」である。ヨハネ的な言である。

## ●【解説】

### 「革袋の涙・生命の光」

ダビデの流浪十年に近き辛酸の歳月の果てに、ペリシテのガテの王アキシの許に亡命の憂身を宿さねばならなかった悲境を背景としてこの詩を読むとき、この詩の詞書ことばがきがその内容にふさわしいことを認めないわけにはゆかない。サムエル前書第21章〜27章を通読した後、この詩は味わるべきであろう。

併し今、私はここにダビデの筆と断定することを控えて、この詩句そのものから与えられる真理内容を主體的に把握し、解説を試みたいと思う、尤もかかる態度が私の詩篇解説に於ける一貫した方法ではあるが。たといダビデの作と想定して解説する場合でも、その側



面的客観的解説のみでは、素と主意主情的詩歌のパトス面に触れるよしもないわけで、然るべきロゴス面の探求は能う限りなされねばならないが、パトスの本城への突入はやはりパトスによるより仕方がないのである。作者の主意主情は「アン・ジツヒ」（それ自体）には竟に永遠に解説者の彼岸にある。神の外何びとが人の心を知り得んや。

それ故に解説は単に近似性を目途することではなくして、作者の主意主情に肉迫することが同時に、聖霊による展開として作者の文字の奥からの迫力として自覚されねばならない。聖霊による展開であり、文字の奥からの迫力であるが故に、解説は決して一義的に限定されるべきものではない。聖書が神に捕えられたる魂の告白の書である限り、その解説はやはり、かかる主体的な告白であることをその本質的性絡とすべきであろう。聖書解説の態度に、無教会、教会、カトリックの性格があらわれるのである。

私自身の惨憺たる解説はともかく、私の志しているところはそういうところにある。

### 「神よ、憐み給え」

と作者は冒頭に叫ぶ。これ祈りのアルパであり、オメガであると思ふ。それは

### 「み旨をなさせ給え」

が祈りの始めであり終りであると同じく。ああ何たる矛盾ぞや。かかる矛盾なき人は幸なる哉。ともあれ、私もこの矛盾なくしては息がつけないのである。この作者にとって敵は具体的な戦の敵であつたらしい。彼は敵に或は囲まれ、或は追跡されている。「終日我に息巻きかかる」というほどに敵は身近に迫っているのである。

また、

### 「彼らは終日わが言をなじる」

彼らはわが言の真意を解しないのである。「彼らの思念」は小理屈である。詭弁であり、巧智である。俗衆は彼らを正しとなし、我を非常識としてけなす。わが言動は彼らの躓きであり、我は彼らに禍を蒙る。これが作者の立場であつた。

### 「彼らは群をなしてひそみ、……わが魂を覗う」

群をたのむ輩は卑劣なる連中である。神を頼みとするこの作者を攻むる者どもは、群をたのみとして来る。真理を護らんとする者と党派の勢力を張らんとする者とはいつの世にも敵となる。

### 「彼らを解き放ちて不義に至らしめよ」

とは深刻な皮肉である。党派根性、因襲の捕われ、そういうものから彼らを解放して、彼らを更に不義に陥らしめるとは、正に神に背ける者たちへの審判の相が滅亡に於てあることを指摘するものであろう。この作者は「諸々の民」を相手にしている、諸種族混成の敵なのであろう。ダビデの場合を想像してむしろ相応しと思う。神の秩序と平和をみださんとする諸々の民に対して、神の憤りと審判を祈る作者の旺なる気魄である。

神に信頼しないでは切り抜けることの出来ない仇敵と艱難に相継いで襲われ、いよいよ



信賴を貰くことにより、怖れを乗り越え、

「肉なるもの我に何をなし得んや」

という、無敵の心境を与えられる作者であつたが、彼も亦「肉なる」弱き者であつた。彼らの誤解と中傷と迫害のため、我は眠りなき夜を幾夜過ごしたことであろう。わが涙は枕をうるおして。神に依頼む我は本能寺の敵を討つことは出来ない。ダビデは光秀ではなかつたのである。追われ追われて、この荒野より、かの洞窟へ、この峯よりかの谷へ、幾度び流浪の旅をさすらねばならなかつたか。

我れも人である。矛盾もあろう。併しわが衷なる善意、わが熱き愛の心を彼らは解してくれないのである。神の我れに対する真実に対して誠信を尽くさんとする魂より出でたる愛は、冷淡を以て応えられ、いたずらに傷つけられつつある。この辛き旅路が幾度くりかえされているか、神は「数えて」あり給う。人知れず流るる涙が徒らに渴ける土砂に吸われることなく、

「汝の革袋に受け入れ給え」

かかる涙を流したことのない人は果たして幸であらうか。義人なし、一人だに無きこの邪曲の世にあつて、師友も先輩も、肉親も兄弟も、我れを真に解し得ぬこと屢々なる世にあつて、真理につける悲憤の涙、弱き自己につける悲嘆の涙、否敵をも世をも、うらみず、天をも地をもうらみず、この宇宙そのものの、この人の世そのものの深い欠陥に、言い知れぬ寂しさを感じる悲哀の涙の流るるとき、これを如何せん！

「神よ、汝の革袋にこの涙を受け入れ給え」

わが友よ、君のなやみは何であらうか。君の憤りは何であるのか。不治の病を負う友よ、不具者となれる人々よ、深き悲しみに心臓の裂かれたる人々よ、不当の苦しみを負う弱小者たちよ、真理を認められざる孤独の魂よ、巧智の輩にその真価を奪われたる独創の人よ、義のために斥けらるる男よ、愛のため重荷を負う女よ、来りてこの詩人と共に、君の涙を神の革袋に注ぎ入れよ。然り、御身らの涙はいずこにいつ流るるとも神はそれを革袋に受け入れ給う。凡そ本当の苦しみ、なやみはすべて神の巻物に記されてある。

天上にあやまりなき真相を記したる書がある。ヨブ記の記者も叫んだのである。

「視よ、今にても我が証となる者天にあり、わが真実を表明する者高き処にあり。わが朋友は我を嘲れども我目は神に向かい涙を注ぐ」(ヨブ16・19、20)

「望むらくは我言の書留められんことを、望むらくは我言書に記されんことを。」

望むらくは鉄の筆と鉛とをもて之を永く磐石に刻みつけおかんことを。われ

知る、我を贖う者は活く、後の日に彼かならず地の上に立たん」(ヨブ19・23、24)

25)

然り、「羔の生命の書」(黙示録13・8)がある。一切の本当のことはそこに記されてある。



地上ではどん底を歩く人が幸いである。不当なるものを担う人が幸いである。無理解も誤解も軽蔑も敵視も無視も何でもよい。地獄を刈り取ろうとする人になりたいものだ。地獄のどん底に降りて往こう。それによつて名誉が友らに帰せられるなら、敵が救われるなら、主イエスよ、汝の十字架のみその地獄のどん底に立ちて在り給え！ 弱き私には惨憺たる涙の外に何もない。

而もどうしたことか、この歡喜と讚美とは。「神に在りて」、主にありて、キリストに在りて、という一事がその讚美の根拠である。

「神に在りて聖言を讀えまつらん」

と詩人も言ってくれている。

再び詩人は、

「我れ神に依頼よりたのみたり。……人我に何をなし得んや」

と告白する。神への信頼とは全く終末的などん底の、100%の投げかけである。私にとつて終末はアルパでありオメガである。私は終末論者として終始するであろう。これは立場なき立場である。底ぬけの深淵に懸っている吊橋である。それはキリストの架け給うた天橋である。この橋の上に立たしめられている者が即ち終末者である。吊橋は見えざる綱つるで吊されている。その綱は「愛のつな」(ホセア11・4)という。

「わが魂を死より救い、わが脚を躓つまずきより助け」

給う確かさは、「汝の誓」が「わが上に」あるからである。誰か神の誓約を彼り得るか。「救い」が確實であることを十字架を以て裏づけ給うた「汝の誓」の有難さよ。かくて残る唯一のことは、「神のみ前に」、歩くことである。神は何でなくとも「生命」であり給う。神が真の永遠の生命でなかつたら、一切は空望に帰する。またその永遠の生命が光でなかつたら全宇宙は暗黒であつて考えることすら能わない。「生命の光」はただこの神のみ前に於てのみ現ずる現実そのものである。そこは歩んで始めて体験し得るなまの世界で、論議の世界ではない。

革袋の涙と生命の光、これは地上の旅路果てるまでの信仰者の現実である。矛盾の相である。本当の解決は地上では絶対に得られない。すでに報いを得たものは大したものではない。神の真理のために、惨憺たる生涯を送るのがこの罪の世に於ては一番本ものである。此くの如き現実を担わせられる人は幸いである。

全く主イエスの

「幸いなる哉」

は文字通りアーメンである。絶対的に終末的実存の担いである。十字架の主在いまさずして誰かこれに耐え、これを担い得よう。復活の生けるキリストの生命の光なくして、誰か「バーカーの谷」(詩84・6「涙の谷」)を生命の光輝く峯として歩くことが出来よう。誰かキリストに在る生命を奪うことが出来よう。輝かしいこの生命の光。初夏の輝きより素晴らし



いこの生命の光を、基督者の衷より溢れるこの生命の光を何に比<sup>たぐ</sup>うべきであるか。ああ終末的実存の矛盾の相よ、革袋の涙と生命の光！ 地獄と天国の峽間<sup>はざま</sup>を歩ましめられる信仰の現実。主体と客体の間に裂かれんとする存在。その魂はついに祈りの外何ものでもない。その心は十字架の愛を痛み、そこに砕けゆく。

（筆者 昭和医科大学教授）

●（参考）「藤井武選集」より

矢内原忠雄・小池辰雄編

「藤井武選集」（岩岡書店版）

小池辰雄

神は現代日本に二大預言者を起こし給うた。若しも内村鑑三をイザヤに比すべくば、藤井武はエレミヤであろう。神は神の義に基づいて祖国を熱愛した。その熱愛は、神に叛ける祖国の現状を嘆いて、「亡びよ」と歌うほどであった。彼がこの叫びを遺して世を去ったのは、1930年7月14日であった。今次大戦により神に打ち砕かれたる日本は、今こそ藤井武の預言に耳をかたむけて神を義とすべきである。神を義とすることによりてのみ、日本の復興は成るのである。我らは今や古えの捕囚時代のイスラエルの如くに「神の僕」となり、苦難を貫いて偉大なる抱負に生くべきである。斯かる歴史的使命を想う時、敗戦日本が藤井武を必要とすること極めて痛切なるを我らは信じて疑わない。

彼は真に聖書の真理をば身を以て生きた人間であった。彼はその43年の生涯の真実なる苦闘と研究、思索と体験、悲哀と苦難を通して、聖書の真理を告白し証言した。彼は聖書を主題としつつ、自然を語り人生を論じ、歴史を批判し文化を論評する。彼の眼は永遠の国を望み、彼の心は「羔の婚姻」の日を待つ。彼を読むは我らにとりて常に靈感である。

彼の死後1931年藤井武全集十二巻が刊行され、1939年再刊された。今回は諸般の事情に鑑み、新しき編集のもとに、全集中の精髓を選んで『選集』とした。かくて三たび世に送ることとなった。願わくは新日本建設の礎石がここに据えられ、聖名に栄光の帰せられんことを祈る。

〔註 藤井武 1988/1/15～1988/30/7/14〕

